



ユーモア

榎本栄次

ユーモアとは洒落や冗談だけではなく、そこに深い意味がある。人が生きて行く上でなくてはならない潤滑油のようなものである。一般常識を超えた予想もしない面白さがある。決まったことを正確にこなすことや、分かりきったことは面白くない。ワンダフルというように、不思議なことがいっぱいあるのがユーモアなのだ。

前回まで紹介した N 君もユーモアである。皆が「あんな生徒はいらない。迷惑する」と思っていた存在が学校を救うことになった。ここに知恵と力のユーモアがある。

そう考えると、聖書の話はユーモアで満ちている。信仰の父と言われるアブラハムは 100 歳、妻のサラは 90 歳で子をもうけた。その子をイサクと名づけた。サラは

「神はわたしに笑いをお与えになった。聞く者は皆、わたしと笑い（イサク）を共にしてくれるでしょう」。これが神のユーモアだ。

イエスのたとえや奇跡物語にもユーモアでいっぱいだ。どうしようもない放蕩息子の話（ルカ 15）。夕方 5 時に雇われたぶどう園の労働者の話（マタイ 20）。徴税人ザアカイの家に客となったイエスの話（ルカ 19）目の見えなかった人が見えるようになった出来事（ヨハネ 9）などである。

世間から人として認められず、自分に罪があるのだと思い悩んでいる人が、普通の人になったということである。子どもが生まれた。親子が再会した。一人前の給与を得た。人が客となった。目が見える。どれ

もどうってことはない話である。ただ、どれもあり得ない笑いが止まらないユーモアな出来事ばかりである。共通して言えることは、スーパーマンの話ではないことと、まともにやっている人には全く面白くないということである。

学生時代のことである。通っていた教会では、毎週礼拝が終わると午後、何人かの青年が近くの国立病院の約 450 床にその日の週報を配って回っていた。内容は聖書の話や説教を書いたものである。ひと部屋 4 人か 6 人で日曜日で家族の見舞いの人もいた。暑い夏の午後にはいろんな格好をしている。先輩たちは一人ひとりに決して邪魔をしないようにていねいに言葉かけをして回っていた。何人かは待っている人もいて、聖書朗読をしてあげたりもしていた。わたしはどちらかといえば早く終わればいいと思いつつ顔を合わせないように機械的に回っていた。

ある部屋に行くと上半身裸でステテコ姿の人がいた。一見、暴力団の人と分かった。体中に入れ墨があり、顔は土色で鬼瓦のようで恐ろしく目は光っていた。文句をつけられたら大変と、顔を合わせないようにしてそそくさを部屋を出ようとした。すると声がかかった。

「おい、兄ちゃん。ちょっと待てや」

「はい何でしょうか」恐る恐る振り返ると「怖がらんでもええ。ちょっと話聞かしてくれ。この前からあんたら配ってくるもん読んでるんやけど、ここに書いてあること、ほんまか」 つづく

映画「沈黙—サイレンス—」によせて

小久保 正

遠藤周作原作、M・スコセッシ監督の映画「沈黙—サイレンス—」を観た。江戸初期のキリシタン弾圧が激しかった時代、行方不明になっている神父の消息を調べ、さらに密かに集会を続けている信徒の群れを助けるために、二人の神父がポルトガルから来て、長崎の浜辺に上陸する。村人に匿われながら、その活動を開始するが、やがて役人に見つかり、村人共々捕まり、棄教することを迫られる。神父は、お前が転べば、村人も厳しい拷問を免れる、彼らを助けるために何故転ばないのかと、迫られる。神は、こんな時にも何の助けも出さず沈黙したままなのか、というのが主題である。拷問の場面が、これでもかこれでもかと繰り返して出て来て息苦しくなる。

観終わって、それにしても江戸幕府は何故、末端の奉行に至る迄あんなに熱心に燃えるようにしてキリシタンを傷めつけ、撲滅しようとしたのだろうか、と思った。それは、キリスト教の布教を通して、宣教師を派遣している国が、日本を支配し、その富を独り占めしてしまうことを恐れたためではないだろうか。宣教師達の思いは、純粋にキリストの福音を極東の人にも伝えることであったとしても、その宣教師を派遣していた国は、次々アジアやアフリカの国を領有化していったのであり、教会はそれを批判することなく、国の力に守られて宣教を行っていたのであった。江戸幕府が、そうした大国の野望から日本を守ろうとして、キリシタンと、それを指導している外国の宣教師

を追放しようとしたのは、無理からぬことであった。イエス・キリストの福音自体は、江戸幕府がムキになって追放しなければならないものではなかった筈だ。信徒は、キリストの福音を信じて、なぜこんなに迫害されなければならないのか理解できなかったに違いない。

宣教師たちが、いつまでも外国からくる宣教師に指導を仰がなければならないように信徒を教育したことは、災いであった。江戸幕府は、それを通して日本人が外国に隷属させられると恐れたに違いない。宣教師たちが、イエス・キリストの福音だけを宣べ伝えて、後の信仰生活は日本の信徒に任せていれば、キリシタンがこんなに迫害されることはなかったであろう。しかも、いつまでも外国からくる宣教師に指導を仰がなければならない体制下では、宣教師たちが日本に来られなくなると、信徒が途端に途方に暮れてしまう。かつて宣教師たちから教えられていた掟に従って、踏み絵を拒否し、殉教して行くしかなかった。もし彼らが、自分で聖書を読み、そこから指針を得る術を知っていたら、事態はかなり異なっていたであろう。遠藤周作は、聖書を自分で丁寧に読むことができたので、踏み絵を踏んでも許して下さるイエスを発見することが出来たのだった。日本における過酷なキリシタン弾圧は、国家と結びついた教会が、聖書を独り占めした結果がもたらしたものであった、と言えないか。

折しも、昨年はルターが宗教改革の声を上げ、誰もが日常の言葉で聖書を読めるきっかけを作ってから500年であった。

もみじまつり寄付金

2017.10.1-11.30 順不同・敬称略

中村 信博、八田 一郎、竹中 百合子、八田 尚嘉、ひいらぎ税理士法人、林 宗一郎、奈倉 道隆、安住 宗住、(株)柴橋商会京都支店、白子 宗令、浅田 凉子、有岡 雅行、宮本 桂子、多木 秀雄、喜多村 やよい、牛尾 曜子、匿名氏、松本 圭子、(株)三原工務店、株式会社藤木工務店京都支店、鳥井 清司、魚木 アサ、佐野 千枝子、長谷川 義紘、中村泰洋園 中村英明、北野 宗香、荒本 千代子、社会福祉法人修光学園、小林 哲夫、佐々木 紘児、手銭 秀夫、小久保 正



ありがとうございました。

関西セミナーハウス活動センターへの賛助・寄付金

2017.12.1-2018.1.31 順不同・敬称略

岡野 彩子、徳丸 延子、白方 誠彌、西岡 裕芳、木原 諄二、柳井 一朗、小山 稔、竹中 百合子、島田 誠一、日本キリスト教会吉田教会、信岡 茂浩、五十嵐 萬里子、山本 良昭、西川 武、鳥井 清司、島田 恒、松本 嘉一、和田野 勢津子、内藤 弘子、菅 恒敏、千里山キリスト教会、遠藤 勇、徳永 恂子、(株)こころぬいぐるみ病院、ホッジ クリスティーナ 紀子、神戸ドイツ語教会、国際シャローム・キリスト教会、蔭山 淳、河崎 玲子、杉本 尚司、武田 正一、今井 奈都子、日野 多栄子、山本 茂、在日大韓基督教会京都教会、高橋 望、公益財団法人京都YMCA、安野 優美、米澤 敏子、南 和子、河合 良子、君村 千代子、東 千代、廣瀬 芳之、佐々木 公子、武山 美登里、藤本 和子、日本基督教団世光教会、真鍋 裕子、日本基督教団天満教会、佐藤 眞弓、大島 庄吾、日本基督教団倉敷教会、小久保 正、匿名氏

ありがとうございました。